神塚淑子著『道教經典の形成と佛教』

横手　裕

本書は神塚淑子先生の論文集である。著者の神塚先生は名古屋大學で三十七年の長きにわたって教鞭をとられ、退職を迎える年に一つの區切りとして成果をまとめたと述べられている（「あとがき」）。著者には『六朝道教思想の研究』（創文社、一九九九年）があるが、本書は主にその後に著された論考をまとめられたものといえよう。目次に據りつつ内容と構成を示すと以下のようになる。

序章

第一篇　靈寶經の形成とその思想

第一章　靈寶經と初期江南佛教――因果應報思想を中心に――

第二章　靈寶經における經典神聖化の論理――元始舊經の「開劫度人」説をめぐって――

第三章　靈寶經に見える葛仙公――新經の成立をめぐって――

第四章　六朝道教と『莊子』――『眞誥』・靈寶經・陸修靜――

第二篇　天尊像考

第一章　隋代の道教造像

第二章　天尊像・元始天尊像の成立と靈寶經
第三章　元始天尊をめぐる三教交渉
第三篇　道教經典と漢譯佛典
第一章　『海空智藏經』と『涅槃經』――唐初道教經典の佛教受容――
第二章　『海空智藏經』卷十「普記品」小考――道教經典と中國撰述佛典――
第三章　佛典『溫室經』と道典『洗浴經』
第四篇　日本國內所藏の道教關係敦煌寫本
第一章　國立國會圖書館所藏の敦煌道經
第二章　杏雨書屋所藏の敦煌道經
第三章　京都國立博物館所藏の敦煌道經――「太上洞玄靈寶妙經衆篇序章」を中心に――
第五篇　唐代道教と上清派
第一章　則天武后期の道教
第二章　司馬承禎『坐忘論』について――唐代道教における修養論――
補　論　石刻坐忘論をめぐって
第三章　司馬承禎と天台山
終　章

內容は書名の通り、道教經典と佛教との關係が主要なテーマとなっている。序章で述べるところでは、上清派や『太平經』に關することは前揭の舊著で考察したので、本書では道教經典のなかでも三洞のうちの洞玄に屬する經典、すなわち靈寶經を主な資料として佛教の關わりに注目しながら檢討したといい、實際に第一篇はもちろんのこと、第二篇から第四篇に至るまで、おおむね靈寶經自體もしくは靈寶經と關係の深い內容を扱ったものとなっている。ただし上清經など、必ずしも靈寶經そのものではない重要經典についての論考も收錄されている。第五篇の司馬承禎『坐忘論』の論考は評者も學生時代に模範的な論文として拜讀しており、「六朝道教思想」をテーマとした舊著には收錄されなかったが、再び本書で出會えて懷かしく嬉しくもあった。

評者は六朝隋唐道教については門外漢であり、個々の

章について專門とする時代が違う自分がピント外れの多辯を弄してもあまり意味がないと思われるうえ、細かく論評する紙幅もないので、愚行はなるべく控えたい。以下はあくまで印象論に過ぎないかもしれないが、評者なりに考えたことなどを記してみたい。

著者の舊著の場合も同様であるが、全體として先行研究の考え方とその成果をほぼ適切に繼承しつつ思考された着實な論考がそろえられている。すなわち、本書は六朝隋唐の主要な道教經典といえる靈寶經と、それに關連する重要テーマについて、安心して依據できる知見を學ぶことができる好著になっているといえよう。第一篇以下の靈寶經に關連する各章は、それぞれ長年の研究と穩當な考察に基づく價値ある成果である。中國古來の觀念と大きく異なる外來の佛教思想が、いかにして受入れやすく中國の傳統思想と融合させられたか、その解決策を靈寶經の中に見い出せるとし、かつそれを示すところに靈寶經の意義があるという旨の指摘が要所々々でなされており、これがすなわち本書を通じて著者が最も明らかにしたかった點のひとつということになるであろう。また、葛仙公を中心とする靈寶經の傳授系譜、道教造像の變遷の歴史、『海空智藏經（海空經）』が『涅槃經』をいかに下敷きにしているか等々はもはや道教史の基本として知らなければならない知識であるが、本書はそれらを適切な手法で解明しつつ詳說してくれるものであり、評者も今後何かにつけて參照させていただくことになると思う。

さて、とはいえ評者にとって特に面白く思われるのは、本書が靈寶經を論じると言いつつも最後の第五篇と終章で上清經を論じて締めくくっていることである。この配置には獨特の配慮があるように感じられた。とりわけ、本書のためにわざわざ書き下ろされた終章の中でも結論的役割を與えられているように思われる最終節「三　上清派の傳統へ」で著者は簡潔ながら靈寶經と上清經の關係史を論じ、則天武后の頃から上清派の傳統に對して特別な關心を寄せる新たな潮流が起こることを論ずる。ここで著者は、歴史的な事實としてこの潮流を論じつつも、

研究者に對してもう一度、以前に比べて近年の日本で關心が薄れたかにも思われる唐代の上清派あるいは上清經へまなざしを向けるように呼びかけているような感覺をおぼえた。もしかするとそれは評者の考え過ぎなのかもしれないが、唐代の「上清派」をいかに考えるべきかなど、實際もっと議論されてよい問題が少なからずあるのも確かなのではないかと思う。

ちなみに、上清經と靈寶經の關係史は六朝隋唐道教史でも非常に重要なテーマであろうが、長い目で見た道教史上でもやはり重要なポイントである。たとえば「道藏」は三洞四輔の七部によって構成され、その序列をもとに經典が排列された。すなわち三洞の筆頭である上清經からはじまっていたはずであった。ところが、現存する唯一の道藏である明版「正統道藏」は『靈寶無量度人上品妙經（度人經）』すなわち靈寶經が筆頭におかれ、上清經の中で最高に位置づけられる『上清大洞眞經』はしばらく後に現れる。三洞四輔の枠組みは繼承されてはいるが、筆頭は『度人經』およびその關連文獻が置かれている。こういった「道藏」などの經典排列における上清經と靈寶經の逆轉（ただし靈寶經類がこぞって道藏の先頭に配置されているわけではないので「大逆轉」ではないが）がいつどのように起こるのか。あるいはその兆しはいつ頃からみられるのか。本書には靈寶と上清の「齋」について類似した微妙な關係への論及もあるので、著者のご考察やご意見を期待したい。

さて、やはり終章で著者は唐代における「上清派の傳統を見直す動きは、道教の世界の幅廣さをあらためて氣づかせる契機になったものと思われる」と指摘する。そのような面ももちろんあるだろう。ただし、道教は靈寶經と上清經だけではない。たとえば、前漢時代の黄治の術に遡源する金丹術は、唐代ではひとつの道教の代表的イメージになっていたようにも思うが、『周易參同契』その他の金丹術文獻は、上清經に關心を寄せる知識人層、靈寶經の影響の強い民衆たち、そして『甄正論』などで靈寶經を念頭に道教批判を繰り廣げた佛教人士たち等々にとって、どのような位置を占めていたのか。あるいは、

（A5判、五六七頁、二〇一七年十月、名古屋大學出版會、九八〇〇圓（税別））

たとえば『黄帝陰符經』のようなタイプの經典はなぜ唐代に現れ、靈寶經や上清經の道教とどのような關係にあるのか。簡單にでも唐代の「道教」全體に對する見通しなど示して欲しかったが、それは窺えない。本書では、ある意味で見事なまでに靈寶經と上清經の外の問題には觸れないので、敢えてそのような方針をとっているのかもしれない。やはりまた別の機會にご高見の披露を期待したい。

最後に、本書は靈寶經を主要な對象としているが、たとえば中國の王承文、劉屹、王皓月、臺灣の謝世維などの各氏が近年比較的盛んに靈寶經研究の著書や論文を發表しているように思われる。これら最近の成果と本書との關係も把握したかったのだが、彼らをはじめとする靈寶經に關する比較的若い世代の最新の研究への言及や引用が大變少ないのでわかりにくかった。そのあたりをいかに理解するかについては、本書の成果を繼承してゆかなければならない次の世代、あるいはさらにまた次の世代の研究者の課題ということになるのかもしれない。